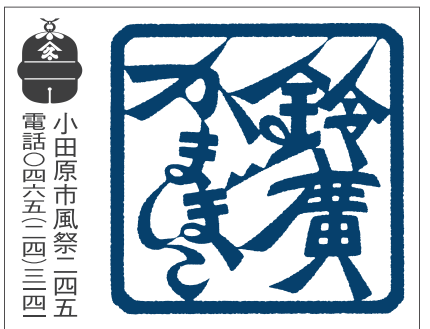




◆大相撲よもやま話◆

「九州場所」の変遷

九州で初めて大相撲の本場所が行われたのは昭和五年のこと。三年前の昭和二年、東京と大阪の相撲協会が合併してそれまでの年二場所制から年四場所制に移行して、東京での年二場所のほか、年二場所の地方本場所は大阪に限らず、それ以外の地方でも行うようになり、京都・広島・名古屋に続き、昭和五年十月に福岡での本場所開催が実現した。

会場は須崎裏に築かれた福岡仮設国技館。入口に大アーチが設けられた二万四千人収容の会場での晴天十一日間の興行は連日満員の大盛況で、大関玉錦が十三勝二敗で優勝した。再びの本場所開催も期待されたが、昭和七年、相撲界を揺るがす春秋園事件が発生。脱退した大量の力士が大阪を本拠にしたこともあり、八年からは東京だけの年二場所制に逆戻りして、九州での本場所開催は遠のいた。

昭和二十年の終戦後、焼け野原からの再生を目指す相撲協会は、再び東京以外での開催に視野を広げ、二十三年十月、大阪で十七年ぶりに本場所を開催。さらに、京都、北海道、名古屋などで「準本場所」を行った。そして、昭和三十年十一月、「福岡準本場所」が実現する。博多の中心街・天神に開業した福岡スポーツセンターのこけら落としとして行われた十五日間の興行は大盛況。

当時は一月、五月、九月が東京、三月が大阪の年四場所制だったが、一年後の三十一年十二月の二度目の福岡準本場所開催後、翌年からの本場所への昇格が決定した。こうして昭和三十三年十一月、戦後初めて開催された福岡での本場所は、伏兵の東前頭十四枚目玉乃海が全勝優勝。隣県の大分出身で、当時は珍しかった金色の廻しを締めての活躍が大いに話題となった。翌三十三年には名古屋場所も本場所に昇格し、年六場所制が確立。福岡の十一月場所は一年納めの「九州場所」として定着する。

昭和三十年代から四十年代の会場は、準本場所時代から続く福岡スポーツセンターだった。昭和四十五年、新関脇貴ノ花(のち大関)が大関、北の富士、玉の海の三横綱を相手に二分から五分に及ぶ大熱戦を展開し、いずれも惜敗して七勝八敗と負け越したときは、大いに場所を盛り上げたとして、福岡スポーツセンターから異例の感謝状が贈られている。

昭和四十九年から会場となったのが、天神からほど近い菓院の九電記念体育館。幕開けの年は小結魁傑(のち大関)が横綱北の湖との決定戦を制して初優勝を飾っている。

昭和五十六年からは現在の会場である福岡国際センターに移転。博多湾に面した開放的な新会場を得意にしたのが横綱千代の富士で、幕開けの年から九州八連覇を成し遂げた。その後、再びここで抜群の強さを見せたのが白鵬で、平成十五年から九州六連覇を達成。ただし、この二人の連覇が止まったのも九州で、昭和

六十三年には大乃国が横綱同士の千秋楽結びで千代の富士の連勝を五十三で止めて意地を見せ、平成二十二年には二日目に平幕時代の稀勢の里(のち横綱)が白鵬の連勝を六十三で止める大金星を挙げている。こうして十一月場所の開催地として定着し、数々の熱戦の舞台となった福岡だが、令和二年は新型コロナウイルス感染拡大予防のため、六十四年目で初めて福岡ではなく東京での開催となった。「相撲が始まらない」と博多の街に冬が来ない」ともいわれ、新鮮な魚などの食の魅力にも満ち、楽しみにしている相撲関係者も多い。来年は相撲が帰ってくることを、地元の人々も相撲関係者も心待ちにしている。



九州場所が初めて本場所に昇格した昭和三十二年、会場の福岡スポーツセンターから博多の街へと繰り出した触れ太鼓



昭和四十九年から五十五年まで会場となった九電記念体育館



昭和五十六年から現在まで会場となっている福岡国際センター



日本相撲協会公式チャンネル
「親方ちゃんねる生解説」



フォトレコ 相撲



団体ご相談受付中!
03-3622-1800



◆十一月場所の優勝力士◆

試練を乗り越えてつかんだ涙の初優勝

平成元年十一月場所優勝

小錦 (西張出大関 十四勝一敗)

ハワイ出身の小錦は、巨体から繰り出す圧倒的なパワーで相撲界に衝撃を与え、独特のキャラクターでも愛された名大関だ。

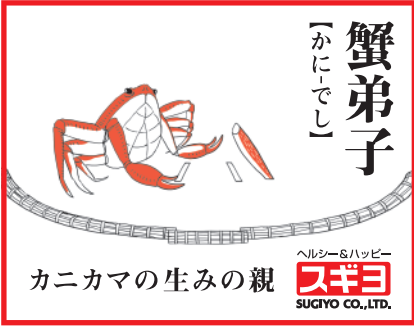
強烈な旋風を巻き起こしたのが入幕二場所目の昭和五十九年九月場所。西前頭六枚目で千代の富士、隆の里の両横綱や大関若嶋津を圧倒し、十二勝三敗で殊勲賞と敢闘賞に輝いた。パワフルな突き押しで相手をなぎ倒す姿は、「黒船」と恐れられ、すぐにも優勝し、大関、横綱へ駆け上がると思われた。

ところが、相次ぐケガに阻まれ、苦しい時期が続く。それでも辛抱を重ねて突き押しに加え右四つの相撲も身につけ、昭和六十二年五月場所後に外国出身力士として初の大関昇進。いよいよ優勝、横綱との期待が高まるが、あと一步届かない。昭和六十三年一月場所は十三勝したが、十四勝の大関旭富士(のち横綱)に及ばなかった。その後は精彩を欠き、勝ち越すのがやっと。負け越すこともあった。平成元年九月場所は五勝十敗。しかし、三度目のカド番で迎えた同年十一月場所、辛抱が報われる時が来た。

この場所、優勝候補筆頭は東横綱千代の富士だった。直前の九月場所は史上最多の通算九百六十五勝を挙げ、十五戦全勝で二場所連続二十九回目の優勝。相撲界から初の国民栄誉賞を受賞し、円熟の時を迎えていた。しかも十一月場所は特に強く、前年まで八連覇。この年も序盤から好調で、六日目に東前頭三枚目両国に敗れた以外は白星を並べていた。

一方、西張出大関小錦は、カド番の危機に加え、初日の五日前にハワイの両親が交通事故に遭って入院し、二泊三日で緊急帰郷。調整不足と見られていた。しかし、初日は東前頭四枚目太寿山、二日目は東前頭筆頭花ノ国をいずれも寄り切り、三日目は西小結霧島(のち大関)を押し出し、四日目は過去七戦全敗と苦手な西前頭二枚目安芸ノ島を引き落として波に乗る。五日目は西前頭三枚目栃乃和歌を寄り切り、六日目は東前頭二枚目琴富士を突き出し、七日目は前日千代の富士を破る殊勲を挙げた両国を押し出し、単独首位に立った。

八日目に西関脇寺尾を寄り切って勝ち越し、カド番脱出。西前頭四枚目孝乃富士を突き出した九日目には、一敗で追うのは千代の富士だけとなった。十日目は西大関旭富士を押し出し、十一日目は東大



念願の天皇賜盃を抱き、感無量の表情

関北天佑を寄り切ったが、千代の富士も譲らず、二差でビタリと追走して重圧をかける。そして十二日目、千代の富士と同じ九重部屋の西横綱北勝海の下手出し投げに屈して初黒星。十三日目の千代の富士戦は、二敗で並んで迎えることとなった。

小錦はここまで千代の富士に五勝十八敗。初顔で圧倒したほか三連勝したこともあるが、徹底的に研究され、突き押しをかわされ、組み止められて敗れることが多かった。追いつかれた流れからも小錦不利か―そんな見方を小錦は見事に覆す。あてがわれ、イナされても辛抱強く突き続け、執念の突き出し。大きな関門を乗り越え、再び単独首位に立った。

十四日目は東前頭七枚目巨砲を突き出して単独首位を保ち、勝てば優勝決定の千秋楽の相手は東関脇琴ヶ梅。幕内での対戦成績は、過去六勝八敗の強敵だ。緊張からか足が出なかった小錦だが、あきらめず突き続け、最後は寄り切って初優勝決定。勝ち残りの控えて、頬を伝う大粒の涙をタオルで何度もぬぐう姿に、優勝への強い思いがにじんだ。千代の富士戦や琴ヶ梅戦で見せた突き押しは、黒船旋風を巻き起こした若い頃の圧倒的な迫力だけでなく、粘り強さや辛抱強さも加わっていた。相次ぐケガなどの試練を乗り越えるなかで培った、心の強さでつかんだ初賜盃だった。

その後も二度の優勝を果たした小錦。惜しくも綱取りは成らなかったが、大関から陥落してもひたむきに相撲を取る姿がファンの共感呼び、長く愛された。平成九年十一月場所限りで引退後、相撲界を離れ、現在はKONISHIKIの名でタレントとして活躍しながら、温かく土俵を見守っている。

◆大相撲「モノ」語り◆◆

土俵

その名のとおり土と俵でできた土俵には、スポーツ、伝統文化、神事という相撲の多彩な魅力が詰まっている。

二十の俵で形作られる直径十五尺(約四百五十五センチ)の円は、そこから出たら負けという、勝負を決める境界線として大切な役割を果たす。これは、世界各地の伝統的な格闘技のなかでも珍しいルールであり、格闘技でありながら相手を痛めつけることを目的としない、老若男女に親しまれるスポーツとしての相撲の魅力の源となっている。

土俵づくりは「土俵築」と呼ばれ、年六回の本場所ごとに呼出が総出で三日間かけて新しくつくりなおす。機械を使わず、タコ、タタキといった特殊な道具を使って、すべて

手作業で行う職人技は、伝統文化そのもの。本場所中、ジヨウロで水をまき、竹ぼうきや手ぼうきでくなどとして土俵を最適な状態に保つのも、呼出の大切な仕事だ。

土俵に神様を迎え入れ、十五日間の安全を祈る儀式が「土俵祭」。初日前日、立行司が祭主を務めて行われる。榊と御神酒で祓い清め、祝詞をあげ、土俵の成り立ちを表す「方屋開口」の口上のあと、勝ち栗、かやの実、洗米、昆布、するめ、塩を中央に鎮める。この儀式を経て初めて、土と俵の塊が神聖な土俵となるのだ。



初日前日の土俵祭。祭主は立行司四十一代式守伊之助